

④ 追想、兒幼時、嘗患_レ所_レ謂西目者、日過_レ西則瞢然無_レ視也、先考甚憂_レ之、藥餌無_レ所_レ不至、邑山中有_二神祠_一、先考乃祈焉、毎日及_レ暮、獨肩_レ兒詣_レ神者、凡數十回、山路昏黒、兒只恐_二狐狸之爲_レ怪也、當_二是時_一、家産富盛、不_レ乏給使、而躬親冒_レ夜、陟_二跋山路_一、而不_レ厭_二其勞_一、先考之恩、實昊天無_レ極、

読み

追想、兒幼時、嘗つて所謂西目を患ふなり。日西を過ぎれば則ち瞢然として視る無しなり。先考甚だ之を憂ひ、藥餌至らざる所無し。邑山中に神祠有り。先考乃ち祈るなり。毎暮に及びて、獨り兒を肩にして神に詣でること、凡そ數十回、山路は昏黒、兒は只狐狸の怪を爲すを恐れるなり。この時に當りて、家産富盛、給使乏しからず。而れども躬ら親は夜を冒して、山路を陟跋す。而るに其の勞を厭わず。先考の恩、實に昊天極り無し。

訳

想い出。私が幼かったとき、かつていわゆる鳥目を患ったことがある。陽が西の刻(午後五時頃)を過ぎると暗くなって見ることができなかつた。亡き父は、とてもこの事を心配していた。薬や薬となる食べ物に至らないということを決してなかつた。村の山中に神様を祀る祠があつた。父はそこで祈つた。毎日、暮れになると獨りで私を肩に乗せて神様に詣でること、およそ数十回。山路は真つ暗、私はただ狐や狸が化かすのを恐れていた。この時には、家の財産は豊であつたので、使用人達も少なからずいた。それなのに、自分一人で親は、夜に出て行って山路を登り下りしてくれた。それであるのに、その苦勞を嫌がることはなかつた。父の恩は、実に広大な天のように、大きく無限のものだ。

言葉

者_二なるハ_一 なるもの 人物・事物・所などをさす 語調を強めるための助字。

西目_二とりめ_一、鳥目 大部分の鳥のように、夜になると物が見えなくなる眼病。夜盲症。

西_二トリ_一 現在の夕方の時頃

瞢_二ボウ_一

昏黒_二コンク_一 日が暮れて暗くなること

藥餌_二ヤクジ_一 薬となる食べ物。②薬と栄養のある食べ物

至_二目指すところまでとどく

神祠_二しんし_一 神を祭る祠堂。神のやしる。ほこら。

躬_二ミ_一 キユウ (みづから)。我が身

冒_二オカス_一 オオウ 無理をしてのりきる

陟_二チヨク_一 昇る

